様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 ２ 日現在

機関番号：３０１１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１２２６７

研究課題名（和文）アルツハイマー型認知症高齢者の「一人歩き」の特徴とその意味の解明

研究課題名（英文）Elucidation of the characteristics and meaning of "wandering" in elderly people with Alzheimer's disease

研究代表者
宮地　普子（MIYAJI, Hiroko）

北海道医療大学・看護福祉学部・准教授

研究者番号：６０３６４３０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はアルツハイマー型認知症高齢者の「一人歩き」の特徴を明らかにすることを目的とした、介護者や家族の語りをデータとした質的記述的研究である。認知症高齢者の「一人歩き」に関連したものを逐語録データとして構成し、分析に使用した。その結果、本研究の対象者の「一人歩き」には散歩や仕事に行くなどの目的があった。認知症進行度や生活背景などの関連要因と行動の意味を把握したケアが必要であると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
高齢化に伴う身体状態の悪化は一人歩きの頻度や範囲を縮小させるが、本人の一人歩きへの希望（目的）は残っていることから、身体状態を考慮した認知症高齢者の一人歩きの目的に沿ったケアの必要性が示唆された。また、認知症の進行や生活背景などの関連要因とともに行動の意味を捉えたケアについて、認知症高齢者の世界に応じた看護を検討していくことの必要性が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the characteristics of "wandering" in elderly people with Alzheimer's disease. The method of research was a qualitative study, and the talk of caregivers and families with Alzheimer's disease was used as data. It was created and used for analysis of information related to the "wandering" of elderly people with dementia.
As a result, "wandering" of the elderly with dementia had the purpose such as going for a walk and work. It is necessary to understand the meaning of the behavior and related factors such as the progress of dementia and the background of life.

研究分野：精神看護学

キーワード：認知症高齢者　アルツハイマー型認知症　wandering　一人歩き　生活世界

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

介護する家族および介護福祉施設において、対応が非常に困難な認知症の行動・心理症状（以下、BPSD）の一つが「徘徊」である。徘徊は「狭義では一過性で、目的のない、ほとんど抗拒不能な心迫的遁走である。広義では目的のない屋内外の徘徊、移動、外出などを総称する」と定義されている（新版精神医学事典）。

徘徊で行方不明になった認知症高齢者は、平成 25 年度で 10,322 人にものぼり、前年度より 7.4%増加している。約 98%は 1 週間以内に所在が確認され、自宅等に戻ることができたものの、所在確認時の死亡者数は 388 人、今もなお所在不明である人がおり、その数は年々増加している。このような認知症高齢者への対策として、各市町村において徘徊見守り・SOS ネットワーク事業の実施、GPS 等による徘徊探知システムを導入する自治体があるなど、彼らに対する地域での対策は進められつつある（厚生労働省 2014）。しかし、交通事故等の二次被害に遭う可能性も高く、その場合は家族が責任を負うことになる等、徘徊する認知症高齢者と家族を取り巻く課題は多い（赤沼 2015）。

このように、徘徊による認知症高齢者の安全の確保とそれに伴う介護者の疲弊を取り除くことは急務であるが、「徘徊」の定義は精神医学的な意味合いが強く、対策は事故防止の観点から、彼らの監視に傾きやすい。

上田（2015）は、行方不明の対策を講じるだけでは対症療法に過ぎないと述べている。そして、認知症高齢者の人がどんな思いで「徘徊」するのか、彼らの心情と生活を考えるという最も大切な視点が抜け落ちていると述べ、彼らがどのように感じ、考え、生活しているのかを診る認知症医療の在り方を模索している。また、天田（2011）によれば、「徘徊」は無目的で病的な行動ではなく、何らかの有意味な背景や効果を持つものである。彼は、「徘徊」の背後にはその都度の個別的な「ストーリー」があって、それは日常生活を営む人間の一行為として理解できるのだと述べている。また、ストーリーは、それぞれの利用者によって、あるいは同一の個人においても、その都度、異なって立ち現れてくるという。つまり、我々医療者の日常生活世界から見れば「徘徊」であっても、彼らには何らかの目的があると考えられるのである。

認知症高齢者の生活世界について研究している阿保（2011）は、「認知症の人は最初、帰ろうとした場所はあると思われる。『徘徊』は無意識に自分の中にまとまりを付けるための行為であり、記憶や見当識障害が進む中で見知らぬ世界から抜け出すことを目的とした自己防衛的な行動としても捉えることができ、身体が還るべき場所を探し、原初的行動としての『歩く』という手段によって自分という存在の居場所を求めている」と述べている。この意味において認知症高齢者は、失われた自分の存在を探し求めて “ 彷徨っている ” のだと捉えることもできる。

我々はこれまでの研究において、認知症高齢者の生活世界に依拠した看護ケアの方策を検討する研究を行ってきた。その結果、生物学的な変化の中で周囲世界の変容を余儀なくされ、自己の存在を脅かす可能性をもっている生活世界に対峙している彼らの現状を明らかにしてきた。（宮地・阿保・渡邊・岡野、2011）（宮地・阿保、2013）。認知症高齢者の本人の捉えている側から理解しようとするこうしたプロセスはまた、今回の研究テーマである「徘徊」と呼ばれる行動の意味への探索を促すものである。

２．研究の目的

アルツハイマー型認知症高齢者の「一人歩き」の特徴について介護者の捉え方とともに明らかにし、認知症高齢者の一人歩きへのケアを検討する。

認知症高齢者の歩く行動は、「目的のない遁走」（広辞苑）と定義される「徘徊」という用語が使用されてきたが、認知症高齢者が捉える世界から彼らの行動の目的や意味をみていくとき、徘徊は「一人歩き」として捉え直され探究されるべき課題である。

これまで、彼らの世界から捉えた行動の目的や意味を解釈し、それに応じたケアを検討してきた（宮地・保,2013）。彼らの行動の目的や意味に注目する立場から、「徘徊」ではなく「一人歩き」とする。

３．研究の方法

１）研究デザイン：質的記述的研究デザイン

２）研究対象：アルツハイマー型認知症と診断され、「一人歩き」をした経験をもつグループホーム（以下 GH）の介護従事者

３）データ収集期間：2015～2017 年 X 月

４）データ収集方法：半構造式インタビューにより（１）～（３）を聴取した。

（１）一人歩きする認知症高齢者の年齢、性別、認知症重症度、日常生活行動、コミュニケーションの状態

（２）一人歩きの時間帯やルート、その時の様子や家族・介護者とのやり取りの様子、一人歩き前後の出来事

（３）一人歩きの理由（本人の話したこと、介護者が捉えたこと）

５）分析方法

（１）対象者の語りから、一人歩きする認知症高齢者の逐語録データを構成した。

（２）認知や身体状態、対象者が語る一人歩きの様子、関わりへの反応を示す内容をコード化し、各入居者別に時系列に整理し、一人歩きの目的とケア内容に着目して分析した。

６）倫理的配慮

対象者に研究への自由参加の権利、匿名性の守秘、成果発表についおよび文書で説明し同意を得た。本研究は、北海道医療大学看護福祉学部倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 16N010009）。

４．研究成果

１）インタビュー対象者の概要

家族および介護者 2 名で１名のアルツハイマー型認知症高齢者について語られた。また、グループホームに従事する介護者 3 名が語ったアルツハイマー型認知症高齢者は 3 名であった。そのうち１名はデータの不足があり分析が困難であったため、合計 3 名を分析対象とした。

家族（娘）は 50 代女性、介護者は 20 代が 2 名、40 代が１名、50 代が 2 名であった。性別は男性１名、女性 5 名であった。インタビューは１名あたり 60～90 分であった。

２）アルツハイマー型認知症高齢者の背景

A 氏　８０代　女性

GH 入居時の HDS-R９、日常生活自立度Ⅲa。元来、几帳面な性格。70 歳まで仕事を続けた。夫と二人暮らしであったが、GH 入居の３年前に夫が死亡。その頃より認知機能の低下が目立ち、診断を受ける。買い物をすることが好きで、決まったコースでスーパーやコンビニエンスストアへ買い物に行く。店に向かう途中に昔の職場がある。次第に料理をしなくなり、簡単に食べられるパンなどを購入しに外出する。入浴の頻度が少なくなり、夫の死亡後は入浴せずデイサービスへ通所。夫の死亡後、独居が困難となり GH 入居。「靴がない」「外へ行く」と言い、夜間帯や夕方に居室の２階から１階の玄関まで頻回に訪れる。日中は希望により介護者と外へ買い物や散歩に行く。ＧＨ入居１年頃、腰痛のためコルセットを着用。肺炎に罹患し、保存的に経過観察中。次第に階段を使用しなくなる。また敷地内を歩くと疲労感が見られ、歩行スピードが遅くなる。

集団にて車移動して買い物に行く。腰痛や肺炎により倦怠感や疲労感が多くみられる。外出する希望や行動の頻度は減ったが、「足カバーはどこにいった」「ちょっと行ってくるわ」と言い、窓の外を見たりする。

B 氏　９０代　男性

GH 入居時の介護度は要介護Ⅲ。GH 入居１年前まで農業に従事し、休むことなく仕事をしていた。妻と息子家族と同居。妻に暴力行為があったが孫には従順である。息子の体調不良で介護が困難となった。身体状態は、足腰が丈夫で力強い。重いものを運ぶ、食器の片付けを行う等、協力的。普段は他者を気づかう様子があり、時に冗談を言い他者と交流している。短期記憶は保たれ、物忘れは少ない。

GH 入居前、田畑を見に行き迷子になり SOS ネットワークを使用していた。GH 入居後は、自宅の畑の様子を見るために帽子とジャンパーを着用し、ひたすら目的地へ向かって歩く。引きとめると暴力行為が出現する。外出頻度が増え、２～３か月後に内服薬調整のため転院した。

C 氏　８０代　男性

GH 入居時の介護度は要介護Ⅳ。会社勤めで定年退職した。妻と団地で二人暮らし。外へ一人歩きすることが多くショートステイを利用していたが、同居継続が困難となり入居した。高血圧。時々失禁する。普段は寡黙で、単独で行動することが多い。面会に来た妻とは会話する。

「役所に行く」と言い、玄関から「ふっ」と出かけ、気づいた時は既に外出している。信号も関係なく進むため、注意を呼びかけると怒る。介護者の息があがるほど歩行スピードは速い。しかし入居中の４年間に身体機能が低下して特養に転居した。

結果１）アルツハイマー型認知症高齢者の一人歩きの目的

本研究の対象者が語る各認知症高齢者の一人歩きの目的が明らかになった。認知症の進行に伴ってあらわれる語彙の減少は、認知症高齢者の一人歩きの目的が捉えにくくなることが予測されるため、過去の様子や背景を聴取・記録することの要性が示された。

A 氏の一人歩きには買い物や仕事に「行く」という目的がある。「〇〇へ行く」は男性に多いとされるが（小澤 1998）、A 氏の場合、70 歳までの勤務経験と買い物に「行く」ことの希望から、ＧＨ入居後の発言につながっていると考えられた。入居当初にみられた頻回な外出希望や玄関までの一人歩きは、リロケーションダメージや居場所のなさが影響していた可能性がある。

B 氏や C 氏の一人歩きの目的は、仕事に関連した一人歩きの目的があった。認知症重症度については、B 氏は中等度、C 氏は中等度から高度に移行する過程であると考えられた。

結果２）認知症の経過から見いだされた一人歩きに関連する要因

A 氏の一人歩きについて対象者の語りを GH 入居前後の経過から構成した結果、以下の６つの特徴的テーマが見いだされた。

（１）身体疾患に伴う疲労・倦怠感による一人歩きの範囲の縮小
（２）身体機能の低下に伴う一人歩きの時間と頻度の減少
（３）ＧＨ入居前から現在まで、買い物が好きで買い物に外出する
（４）一人歩きの目的（買い物・仕事）の言語的表現の減少
（５）身支度の行動と身支度アイテムの変化
（６）住居や介護者など周囲環境に伴う混乱と落ち着き

Ａ氏は場所や人の認知機能が比較的保たれていたことから、A 氏自身が GH の環境に馴染む過

程で、介護者がＡ氏の希望に沿うように変化させたことは、一人歩きの頻度の減少に影響した可能性がある。また現在までの一人歩きの頻度や範囲の縮小は、身体的要因が大きい。A 氏の一人歩きの目的を把握し、外出時の行動を素早く察知する介護者によって安全に買い物や散歩できた A 氏の満足感が推察された。A 氏のように身体状態の悪化は一人歩きの頻度や範囲を縮小させるが、本人の一人歩きへの希望（目的）は残っていることから、身体状態を考慮した認知症高齢者の一人歩きの目的に沿ったケアの必要性が示唆された。

結果３）家族・介護者の捉えた「一人歩き」とケアの内容

対象者が語る認知症高齢者や一人歩きの捉え方は以下が見いだされた。

（１）背景や人柄、現在の行動から一人歩きの理由を捉えていた。

（２）認知症高齢者の背景を把握し、行動を予見していた。

（３）家族と連携して本人の思いを尊重していた。

C 氏の場合、介護者の一人歩きの捉え方は明確ではあったが、場所の見当識の低下や切迫感を伴う一人歩きが見られ、認知症の進行に伴う入居者本人の捉える世界の変容が推察された。

以上、本研究により明らかとなった結果１）～３）から、これまで『徘徊』と呼ばれてきた行動には何らかの意味が存在し、これまでの習慣や生活背景の情報を得ることが重要であることが示された。また、本人の行動に対する介護者の捉え方が彼らとのコミュニケーションや反応に影響することが考えられた。今後は、認知症の進行や生活背景などの関連要因とともに行動の意味を捉えたケアガイドラインを構築し、認知症高齢者の理解の深化とケアの方法を確立することが課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 宮地普子
２．発表標題 アルツハイマー型認知症高齢者の「一人歩き」に関する研究-A氏の特徴とその意味-
３．学会等名 日本看護研究学会第44回学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 宮地普子
２．発表標題 介護者が捉えたアルツハイマー型認知症高齢者の「一人歩き」の分析
３．学会等名 日本看護研究学会第45回学術集会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	阿保　順子 (ABO Junko) (30265095)	北海道医療大学・看護福祉学部・名誉教授 (30110)	